

レーザーコンパス

年 頭 雑 感

佐々木 亘*

Wataru SASAKI*

いよいよ20世紀最後の10年が始まりました。経済大国といわれ、21世紀のリーダーを要求されている日本にとってこの10年は非常に重要な時期になると思われる。先日、アメリカの友人からクリスマスカードが届き、アメリカの研究予算の減少を憂うとともに、日本がどんどん強くなっていく様に思われるとのコメントが書いてありました。確かに、一部の企業が国内で余った資本を海外に投資し、多くの土地やビルを買い占めていますし、科学技術の研究費にしても、昨年度の統計によるとGNPの約3%を支出し、その割合はアメリカとほぼ等しく、総額にしてもアメリカに次いで世界第2位である。これだけを見れば確かに、アメリカと肩を並べ、21世紀の世界のリーダーとしての資格を備えつつあるように感じられるだけでなく、アメリカをも追い越して、まさにトップリーダーとなつつあると、恐怖を感じた友人の指摘も当たっているかに思われる。

しかし、科学技術研究の内容を考えてみると、必ずしも欧米に匹敵し、世界のリーダーのレベルに達しているとは云えない面もある。それは独創的な研究が少ないことである。そのために、世界から日本は外国で最初に考え出されたものをいち早く取り入れそれを製品にして利益を上げる、いわゆるサイエンシーターであると

の批判が集中することになる。日本の科学技術研究は、明治維新に西洋文化を取り入れたとき以来、何に役立つかと云うことが非常に優先されてきた、と云うよりこれが唯一の価値観の基準となってきたといっても過言ではない。このことは従来からしばしば指摘されているところである。それでは、独創的な研究の芽を育てるにはどうしたら良いであろうか。これは研究の自由が保証されている大学で研究に従事しているものとしては真剣に考えなければならないことであろう。

わが国には文化としての科学が存在しないことが、独創的な研究の芽を育てる気風が定着しない原因の一つと考える。日本では学位が各々の学問分野において、工学博士、理学博士、などと与えられるのに比較して、欧米での学位はPhD (Doctor of Philosophy) であって、研究の目標が自然観、世界観の形成にあり、科学は結果として役に立つことが多いが、研究の動機としては役に立つことを前提としない。すなわち、文化としての科学が存在するのに比べて、わが国ではそれが無いままに科学技術を取り入れて来たことが独創的な研究が育ちにくい土壌を形成したと思われる。

これから21世紀に向けて、独創的な研究を育てるために、産業的な意味で「何に役に立つか

*宮崎大学工学部電気工学科 (〒889-21 宮崎市学園木花台西1-1)

*Miyazaki University (Gakuenkibana, Miyazaki 889-21)

？」ということを問わないことを提案したい。それなら、なんの役にも立たないことを好き勝手に国民の税金を使って研究して良いのだろうか。その評価の基準としては、その研究成果が科学それ自身の広い分野に寄与する可能性によって評価されるべきではないだろうか。研究者個人の評価は、着実な進歩と、それらが上記の判断基準で如何なるレベルにあるかによってな

されるべきであろう。以上のように、文化としての科学の形成と、その成果を正当に評価する土壌を育てることが、わが時において、独創的研究を盛んにする一つの方法であると考えている。以上の考えには、多くに異論があることはもちろん筆者も良く承知するところであり、むしろこの拙文がそのような議論を生起する一石になれば幸いである。